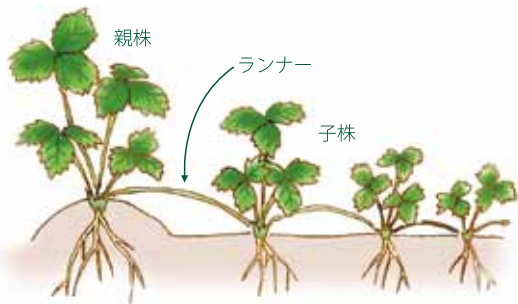




「つぎのおと」を市場や直売所に
出荷する吉見町の清水輝夫さん
(吉見町いちご出荷組合連絡協議
会会長)。夫妻で約3ヶ月のハウス
を3棟使って作付けている。



◆観光農園と市場出荷と

埼玉県のイチゴ産出額は全国 10 位 (平成 26 年産)。県内全域で生産されているが、秩父市、川島町、吉見町、加須市、久喜市、越谷市などが特に盛ん。観光イチゴ園も秩父市をはじめ県内各地にある。

◆ミツバチが受粉を手助け

イチゴのハウスではミツバチが飛び、養蜂箱も見かける。これはミツバチに受粉を助けてもらうため。ハウスの中には媒介する昆虫が入り込みにくいし、第一、晩秋から冬に虫たちは飛ばない。受粉がうまくいかないと、イチゴは実が着かなかったり形の悪い実になってしまうので、生産者は養蜂業者に料金を払って借り受ける。家庭菜園で栽培するような場合、筆先や綿棒で受粉を補助してやると効果的。

◆食べているのは花托部分

イチゴは、ゴマのような種を含む表面の小さなふくらみ 1 粒 1 粒が果実。1 個のイチゴには 200 粒ぐらいの果実が密に並ぶ。ただ、果実は表面にあるだけで、それを中から支えているのが花托という部分。イチゴは果実というより、大きくなった花托を食べる。

ほっぺ、「やよいひめ」、「あまおう」だろうか。イチゴは非常に品種変動の激しい作物で、各県の研究機関などが次々に新しい品種を育成してきた。消費者の好みは、甘くて酸味とのバランスがよいこと、大粒でジューシーなこと、色鮮やかで香りもよいこと。生産者側にとっては、

市場性が高いうえ、丈夫で多収性であることが望み。早生種か晩生種か、パックにしてもつづれにくいかなども品種選定の要件となる。

埼玉県は 3 月 17 日、県が育成したイチゴ 2 品種の愛称を発表した。「かおりん」と「あまりん」。名付け親は秩父市出身の落語家・林家たい平師匠だ。2 つのイチゴは県農業技術研究センター(熊谷市)がおよそ 8 年かけて育種し、農水省に品



左が「かおりん」、右が「あまりん」



県農業技術研究センターの説明会で生産者が新品種のハウスを見学



JA ちちぶ・いちご部会は 30 軒中 23 軒が観光農園。写真は同部会長の田口賢司さんが営む「和銅農園」。70cm ほどの高さにある高設土耕栽培で、通路は車椅子でも入れる十分な広さがある



花にやってきたミツバチと養蜂箱



種登録申請を行っているもの。「かおりん」の登録名は「埼園い1号」。「ふくあや香」と「ゆめのか」の交配で、きわだつ甘さと香りがあり、食感には張りがある。「あまりん」の登録名は「埼園い3号」。「やよいひめ」と「ふくはる香」の掛け合わせで、甘みと酸味のバランスがよくジューシーさがある。県オリジナルの両品種はすでに一部の観光農園で栽培を開始し、埼玉県農林公社種苗センターなどが親株の増産に努めている。広く普及していくことを期待したい。